

都道府県・指定都市番号	1	都道府県・指定都市名	北海道	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科等名	総合的な探究の時間
研究課題	<p>学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究</p> <p>○総合的な学習の時間の取組を基盤とし、質の高い探究を通して資質・能力を育成する「総合的な探究の時間」の実現に向けた指導計画や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、学習評価の在り方に関する研究</p>				
ふりがな 学校名 (生徒数)	ほっかいどうきつぽろきたこうとうがっこう 北海道札幌北高等学校 (953人)				
所在地 (電話番号)	〒001-0025 北海道札幌市北区北25条西11丁目 電話 011-736-3191 FAX 011-736-3193 e-mail sapporokita-z0@hokkaido-c.ed.jp				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.sapporokita.hokkaido-c.ed.jp/				
研究のキーワード					
資質・能力 思考ツール 持続可能な取組 次の学びに繋げる 自己評価					
研究結果のポイント					
<p>○ 生徒の学習状況</p> <p>「総合的な探究の時間」での探究活動の実施から、平日の学習時間が1時間未満である生徒の割合の減少並びに3時間以上学習する生徒の割合の増加が見られ、研究2年目も状況を維持することができた。探究活動を起点とする「主体的・対話的で深い学び」が生徒に浸透している結果であると考えられる。</p> <p>また、各学年で学習習慣の定着が見られた。段階を踏まえた3年間の計画と、それに伴う本校で身に付けさせる資質・能力の可視化、並びに教員と生徒双方が共有した成果と考えられる。同一学年の推移においても増減はあるものの、2年生の後半までには学習時間の定着が見られた。</p> <p>○ 評価の観点</p> <p>評価に関する全教員参加の研究会を複数回実施することで、評価の在り方を教員全体で理解し、身に付けさせる16の資質・能力が評価の土台となることを共有した。現在、各教科ではキーループリックを踏まえ、「いつ」、「どの単元で」、「どのように」評価をするかを検討している。一方で達成の基準の設定や、生徒の自己評価ループリックの評価の妥当性など、生徒の現状を踏まえ、自己評価からの学習評価に結び付ける方法を策定する必要がある。</p> <p>○ 成果の普及</p> <p>11月実施の北海道教育委員会主催による指定事業等における成果発表交流会や、1月実施の研究発表大会（新型コロナウイルスまん延の影響で2学年の課題研究発表を実施せず）では、本校の実践内容を周知できた。また、令和2年度は道内から2校、令和3年度は道外から2校が、総合的な探究の時間等の実践の視察として訪問があった。</p> <p>○ 持続可能な校内の組織づくり</p> <p>2年間で全6回の校内研修会を実施することにより、「総合的な探究の時間」における各学年の実践状況や評価の在り方等を全教員で理解、共有する機会を設けた。諸課題等に対し、本校で育成を目指す資質・能力に基づく評価の視点を教員間で共有することができた。</p>					

1 研究主題等

(1) 研究主題

「総合的な探究の時間」の取組を基盤とし、教科等の学びとの関連を意識した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、学習評価の在り方に関する研究

(2) 研究主題設定の理由

- 学校の現状と課題

平成28年度に、本校は文部科学省の「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラー

ニングの視点からの学習・指導方法の改善に関する実践研究」の指定を受けてから、学校全体で「主体的・対話的で深い学び」に係る実践研究に取り組んできた。その一つとして「総合的な探究の時間」における探究活動の視点を重視した取組を行っている。

○ 研究の目的

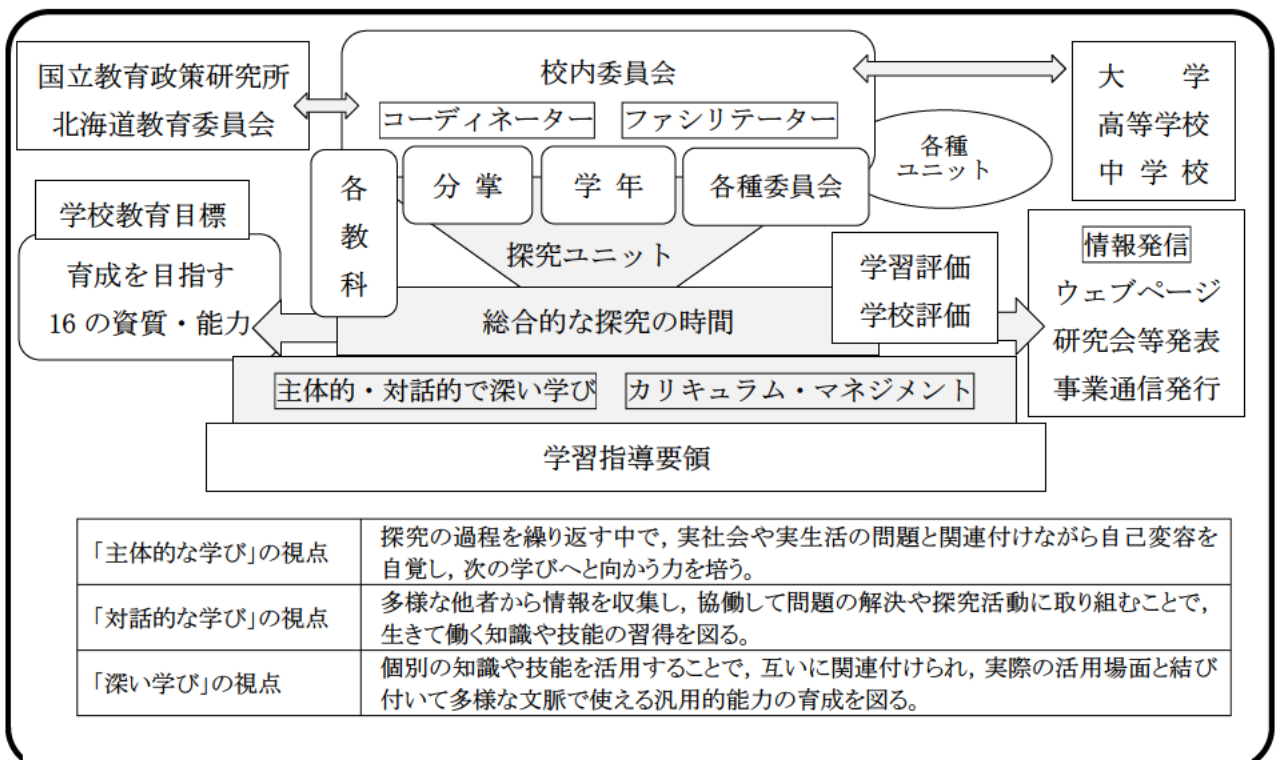
これまでの「主体的・対話的で深い学び」に関する実践研究を基盤として、「探究」を共通の軸とし、「総合的な探究の時間」と他教科・科目等における学びとを相互に関連付けることにより本校生徒の資質・能力の向上を図ることを本実践研究の目的とする。

○ 研究期間中に達成したい目標等

- ・「総合的な探究の時間」と他教科・科目等における「探究」を相互に関連付けることにより、本校生徒に育成する 16 の資質・能力の確実な定着を図る。
- ・「総合的な探究の時間」で身に付けた資質・能力を他教科・科目等で活用することにより、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた学習・指導方法の工夫・改善を一層推進する。

(3) 研究体制

- 平成 28 年度以降、全校体制で取り組んできた「主体的・対話的で深い学び」に関する実践研究で培った知見を基盤として、本実践研究に効果的に取り組むため、取組全体のマネジメントを担う校内委員会を継続して設置した。
- 本実践研究の企画・運営は校内委員会内のコーディネーター及びファシリテーターが行い、学校課題については、少人数のユニットが分掌や学年と連携してその解決に当たった。「総合的な探究の時間」については、教務部と学年が連携した探究ユニットがそのコーディネートを担当した。
- 探究の過程を「総合的な探究の時間」の本質と捉え、学びが「総合的な探究の時間」に留まらず、教科等の学びとの関連性を意識したものになるように、教材や指導方法等を常に分析・評価できる指導体制を構築した。



(4) 2年間の主な取組

令和2年度	<ul style="list-style-type: none"> ・校内委員会の編成（公募制） ・「総合的な探究の時間」及び他教科・科目等での生徒の活動の全体を俯瞰できる資料(進路マップ)の作成 ・思考力、判断力、表現力等を問う問題や探究の過程を意識した問題を作成し、考査等において出題 ・校内研修会の実施（本実践研究の取組の柱の確認・ICTの活用） ・学習評価の実施（年2回）、思考力アセスメントの結果分析 ・研究の振り返り（成果と課題の分析） ・実践研究の中間報告書の作成 ・情報の発信、成果の普及 ＜「総合的な探究の時間」の活動＞ ・進路学習（7月～9月）（個人レポートの作成、プレゼンテーションの実施） ・思考力アセスメント（7月） ・学問探究（9月～10月）（選択した講座におけるグループワーク） ・ワールドカフェ（道徳、11月） ・課題研究（10月～12月）（グループワークポスターの発表） ・1年間の振り返り、ポートフォリオの整理
令和3年度	<ul style="list-style-type: none"> ・校内委員会の編成（公募制）、コーディネート開始 ・探究ユニットの業務の確認 ・校内研修会の実施（ICTの実践事例・主体性の評価について） ・学習評価の実施（年2回）、思考力アセスメントの結果分析 ・研究指定事業等における成果発表交流会での発表 ・道外探究実践校への視察研修 ・研究協議会の実施 ・研究の振り返り（成果と課題の分析） ・実践研究報告書の作成 ・情報の発信、成果の普及 ＜「総合的な探究の時間」の活動＞ ・ワールドカフェ（4月） ・進路学習（7月～9月）（個人レポートの作成、プレゼンテーションの実施） ・思考力アセスメント（7月） ・学問探究（9月～10月）（選択した講座におけるグループワーク） ・課題研究（10月～2月）（グループワークポスターの発表） ・ワールドカフェ（道徳、12月） ・個人レポートの作成（2月～3月） ・1年間の振り返り、ポートフォリオの整理

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

○ 「探究」における教科等横断的な取組

各教科等で実践している探究的な取組と「総合的な探究の時間」の取組が同時期にならないように調整した。また、効果的に生徒の資質・能力を育成するため、内容の配列を工夫した年間計画を作成した(新型コロナウイルス感染症の感染予防のための臨時休業や学校行事の変更のため、実際の取組は作成した年間計画から更に変更した)。具体的には、年間の活動を進路学習と関連付けて示すために「進路マップ」を作成し、1年間の学校生活及び3年間の活動を視覚化できるようにした。

○ 思考ツールの活用

問題を解決する力の現状を把握するため、民間の思考ツールを活用し、様々な思考力の種

類を踏まえて生徒が思考する機会を設定した。

○ 持続可能な教材の開発と実践

従前より実施している「総合的な学習の時間」における取組の資料を、学校全体で共有できるようにするため、教務部内に「探究」ユニットを立ち上げ、学年内で共有していた教材を収集・整理した。教材は生徒の実態に応じて作成するため、前年度の取組を踏襲するのではなく、学年の探究担当を中心にアレンジして作成できるようにした。

○ 学習評価

育成を目指す資質・能力を自己評価できるようルーブリックを作成した。また、学習活動ごとにポートフォリオとして記録を残し、自己評価ができるようにした。各教科が資質・能力の評価を学習評価に反映できるよう、教育計画を作成した。

○ 学習環境の整備

コロナ禍に対応するため、「Google Classroom」や「YouTube」などの ICT を活用した学習の機会の設定し、授業改善を進めた。

(2) 具体的な研究活動

○ 「探究」における教科等横断的な取組

3年間の「総合的な探究の時間」において探究の過程を繰り返しながら、1学年では探究の基礎を学び、2学年では探究の実践を行い、3学年では探究の深化を図った。

また、「総合的な探究の時間」だけではなく、多くの教科・科目において探究的な実践を行う際には、実施する時期の重複などにより、生徒の活動が過多になってしまう時期を作らないよう、年間計画を作成する段階で調整し、生徒・教員ともに負担感が出ないよう配慮した上で実践を行った。なお、3学年で実施した「学問研究」では設定されたテーマを各教科で共有・連携し、複数の教員が3週間にわたり掘り下げる講義やグループワークを実践することで、より多面的な思考力の育成につなげることができた。

○ 思考力ツールの活用

1・2学年で、民間の思考力ツールを活用した。結果をフィードバックするために、掲げられている様々な思考力と探究活動で身に付ける資質・能力とを関連付け、自己評価を行うことができた。

○ 持続可能な教材の開発と実践

「探究」ユニットが企画して校内研修会を実施し、令和2年度に実施した各学年の「総合的な探究の時間」の実践事例について、全教員に共通理解を図ることができた。「総合的な探究の時間」を取り組む上で、「カリキュラム・マネジメント」の定義を明確にする必要があると考え、校内研修会を通して本校におけるカリキュラム・マネジメントの定義付けを行った。

また、1年生が、2年生の課題発表を見る機会を設定することにより、より高度な探究方法を学ぶだけではなく、学校としての探究の在り方をつなぐ役割を担うことができた。

○ 学習評価

令和2年度は、1学年の進路学習において、個人で作成したレポートについて、生徒間でルーブリックを活用した相互評価を行った。また、適切な場面で状況に応じた思考ツールを用いて、生徒自身が自己分析できるようにポートフォリオとして記録を残し、自己評価ができるようにした。

令和3年度は校内に「評価」ユニットを立ち上げ、2度の校内研修会を実施した後、教務部が主体となり3回目の研修会を実施した。実践事例の検討などを通じ、本校が生徒に育成を目指す資質・能力に基づく評価の観点を全教科で共有しながら、教育計画の作成に取り組んでいる。

○ 学習環境の整備

校内に「ICT」ユニットを結成し、ユニットを中心として校内のICT環境の整備を図った。「Google Form」を用いたチェックテストの実施、自己採点及び分析等を行い、授業を通じてフィードバックを実施した。授業においても「Chromebook」を活用して授業を行う教員が増えるなど、授業改善につながるオンラインの活用がなされている。「総合的な探究の時間」でも2学年が実施した課題研究におけるポスターセッションを1学年に配信するため「Zoom」を活用した。

また、令和4年度から始まるBYOD端末の活用に向けて、校内研修会で本校教諭が実践しているICTを活用した教育活動の実践紹介や、全国高等学校の実践事例紹介を行った。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

(1) 生徒の学習状況

○ 2学年生徒の家庭学習時間(11月)

本校が独自に実施している「学習状況調査」によると、「総合的な探究の時間」に係る取組を実施した令和元年度以降では、平日の家庭学習時間が1時間未満である生徒の割合が減少し、3時間以上学習している生徒の割合が増加した。令和2年度は感染症予防の観点から多くの学校行事が縮小、廃止となり、部活動や特別活動の時間が減少していることから、家庭学習時間が増加したと見ることもできるが、令和3年度は、ある程度部活動等の制限が緩和された状況であっても、継続して学習時間が確保される状況であった。

また、「総合的な探究の時間」の学びを進める中で、教員が育成を目指す16の資質・能力と教科・科目との関連性を共有しながら指導することで、探究のテーマと教科・科目との関連性が生徒にも明らかになり、探究学習の深まりを求めると同時に今以上に学習に多く取り組むという相乗効果をもたらした。

(表) 本校における生徒の家庭学習時間の推移(平日)

平日の家庭学習時間	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
1時間未満	11.3%	12.1%	16.0%	11.6%	9.1%	7.1%
1時間以上～3時間未満	70.8%	64.6%	71.7%	71.4%	56.0%	59.7%
3時間以上～4時間未満	16.0%	19.3%	10.7%	14.2%	27.4%	26.3%
4時間以上	1.9%	4.1%	1.6%	2.8%	7.5%	7.0%

○ 学習習慣

1学年から2学年にかけての学習習慣の定着度合いを見てみると、毎日ほぼ決まった時間に学習する生徒の割合が増加傾向にあり、生活習慣も含めて本校の学校生活の中で確立されている生徒が多いことが分かる。

令和元年～令和3年度平均	1年6月	1年11月	2年6月	2年11月
毎日ほぼ決まった時間に学習する	54.8%	49.7%	56.8%	61.5%
宿題の有無やその内容・量によりゆったりやらなかったりする	43.9%	47.8%	41.8%	36.8%
自宅での学習はしない	1.3%	2.5%	1.4%	1.8%

(2) 評価の観点について

○ 評価観点の共有

校内研修会を3回実施することで、評価の在り方を教員全体で考えることができた。また各教科が、身に付けさせる資質・能力を踏まえたキーループリックを作成し「いつ」、「どの単元で」、「どのような方法で」評価するかを考える機会を設定することができた。

● 評価の体系化の確立

今後、ループリックの評価規準と活用をより一層精査していく必要がある。達成の基準の在り方や、生徒の自己評価ループリックの規準の妥当性など、生徒の現状を踏まえ、より深めるとともに、資質・能力の評価を学習評価に結び付ける方法論を検討していく必要がある。

(3) 成果の普及

- 次の取組により、本校における実践を積極的に発信した。今後、他校の教員が参加する研究協議会などを通して、成果をより一層普及する必要がある。

他校からの視察	北海道苫小牧南高等学校(令和2年10月22日)
	北星学園女子高等学校(令和2年12月11日)2年課題研究発表
	宮城県仙台第三高等学校(令和3年10月14日)
	広島県立基町高等学校(令和3年12月14日)
道教委関係者への説明・協議	ICT教育推進課との意見交換会(令和2年9月2日)
	教育委員視察訪問(令和2年9月30日)
	研究指定事業等における成果発表交流会(令和3年11月22日)
報道	北海道学び推進月間の取組に道德教育のWorld Cafeが紹介される(令和2年12月4日)
	大学入学共通テストに向けた学びについての新聞記事が紹介される(令和2年12月8日)
研究発表大会	全21校 33名参加(令和4年1月21日) ※新型コロナウイルスのまん延により、課題研究発表は中止。

(4) 実践研究への総括的評価

○ 校内委員会の役割

平成28年度から本校に設置した、分掌、学年、教科という組織を横断したメンバーで構成される委員会で、本実践研究全体のコーディネートを行った。

本校の抱える課題及び今後の教育について情報を共有するとともに、必要に応じて有志によるユニットを形成し、研究を推進している。

- 各種行事において、学校教育目標を土台とした育成を目指す16の資質・能力を、「いつ」、「どのような行事等で」育成するのかを明らかにするために年間計画を作成したことで、全教員と生徒が目標を共有した活動ができた。
- 進路学習と関連させた計画を作成したことで、3学年の探究ゼミにおいて学びの深まりや進路・職業選択に対する意識の広まり、進路実現に向けた意識の向上を図ることができた。

● 持続可能な校内の組織づくり

一部の実践で生徒の資質・能力を向上させることは難しいため、学校教育全体で教育効果を上げる必要がある。

また、教員の異動により、取組の本質が失われてしまうことも考えられることから、校

内研修会や校内委員会の取組の公開を通して教員間で認識を共有するとともに、本校で目指す資質・能力の育成に向け、生徒の実態に合わせ、取組内容を改善する必要がある。

4 今後の取組

(1) 「探究」を軸とした学びの関連付け

本研究により、本校においては3年間を見通した「総合的な探究の時間」の目標と各学年における実践内容が確立した。これにより探究を踏まえた学習を促す大枠が完成したと考える。

また、探究学習だけではなく、各教科学習や各種行事に関しても、本校が育成を目指す16の資質・能力と関連付け、「いつ」、「どのタイミングで」、「どの資質・能力を身に付けさせるか」を明記した計画を作成し、教員と生徒が年間計画を共有することができた。今後はスクラップアンドビルドを繰り返していく中で、より効果的な学習を考察することはもちろん、教員の異動があったとしても、取組の本質などが引き継げるよう、工夫する必要がある。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた学習・指導方法の工夫・改善

令和4年度入学生から一人一台端末になることを踏まえ、探究活動をより効果的に実施するために、ICTの積極的な活用を促す必要があることから、ICT環境の充実を目指すとともに、「Chromebook」の活用や「Google Workspace」を用いた授業を実践することにより、「主体的・対話的で深い学び」をより一層の充実させる必要がある。

(3) 学習評価の検討

令和4年度入学生の生徒指導要録から観点別学習状況の評価を記載することになることを踏まえ、「総合的な探究の時間」の評価だけではなく、教科・科目の客観的な評価方法について、研修を重ねる中で作成したキーループリックを踏まえ、各教科で評価の時期と方法を検討することが急務である。また生徒が自己評価で活用しているループリックの内容と評価規準の妥当性を改めて検討し、生徒の自己評価を全体評価に反映する方法についても工夫する必要がある。